

八幡西遺跡第2次発掘調査説明会資料

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター 平成 29 年 9 月 2 日 (土) 午後 1 時 30 分

調査要項

遺跡名	八幡西遺跡
所在地	山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡三
時代・種別	古代・近世の集落遺跡
起因事業	一般国道 113 号梨郷道路事業
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成 29 年 5 月 12 日から 9 月 7 日まで
調査面積	3,500 m ²
調査担当者	主任調査研究員 菊池玄輝 (現場責任者) 調査員 後藤枝里子、色摩優吾
検出遺構	竪穴建物、掘立柱建物、濠、溝、土坑、柱穴ほか
出土遺物	土師器、須恵器、陶磁器、金属製品、木製遺物ほか



図1 遺跡位置図 (1/50,000)

1 調査の概要

八幡西遺跡は川西町北端の郊外 (大字西大塚) に所在します。遺跡は、整備が進む「新潟山形南部連絡道路」(国道 113 号バイパス事業) の一部区間 (「梨郷道路」) に当たり、平成 25 年度の元宿北遺跡、同 26 年度の八幡一遺跡 (第 1 次) に続き、計画路線部分の発掘調査となりました。昨年度の 1 次調査は遺跡を縦断する町道の西側 (A・B 区)、今年度の 2 次調査ではその東側 (C 区) が対象です (図 3 左上)。当該事業に伴う八幡西遺跡の発掘調査は今回で終了となります。

2 見つかった遺構と遺物

昨年度の A・B 区と同様、今年度の C 区でも北側 (微高地) と南側 (緩傾斜の低地) の微地形の差異が確認できました。ただ、遺構の分布が希薄だった南側の低地に C 区ではむしろ遺構が密集し、後述する近世の時代には屋敷地の中核となるようです。湿潤で不安定

な立地の制約にかかわらず、別の意図で土地を選定しているのでしょうか。

以下では現段階の理解ながら、推定した時代別に代表的な遺構について説明します。

古代 古代の遺構は少数ながら、微高地上に点在しています。

竪穴建物 (ST1730) は C 区の中央に位置します。竪穴の平面形は隅丸長方形で、大きさは長軸長 5.7 m・短軸長 4.1 m、深さは 50cm です。柱穴など建物を構成する要素は検出できなかったものの、竪穴の南東隅から外に向かう排水溝が見つかりました。排水溝は古代では工房 (非居住施設) での発見例が目立つことから、日常生活に伴う排水ではなく、手工業生産の過程で生じた汚水処理用であった可能性が指摘されています。遺物は少量ながら、床面で平安時代の土師器と須恵器が出土しました。

竪穴遺構 (ST2186) は C 区の西側に位置します。竪穴部は近世の区画濠 (SD1732) と中型土坑 (SK2800) に大きく壊されてい

ます。竪穴の平面形は隅丸長方形で、大きさは長・短軸長 5.0 m、深さは 20cm です。竪穴の底部は地山を掘り下げたままで、柱穴など建物を構成する要素や炉など生活のための施設は見つかりませんでした。遺物は埋土から少量の平安時代の土師器と須恵器が出土しました。

掘立柱建物は 2 棟見つかり (SB2912・2913)、どちらも C 区の北端に位置します。

SB2912 は桁行 2 間以上・梁間 2 間の推定南北棟で、桁行は発掘区外へ続きます。柱間寸法は桁行が 6.0 尺等間、梁間は 7.5 尺の等間です。SB2913 は桁行 3 間・梁間 2 間の南北棟で、建物の中央を横断する近世の区画濠 (SD1001) に壊されています。柱間寸法は桁行が 5.5 ~ 6.5 尺、梁間は 8.0 ~ 8.5 尺です。この 2 棟は広めの間尺を基調とし、主軸方位が真北からやや西に振れる点で一致します。

近世 C 区の調査では近世の遺構が最も多く見つかりました。敷地を区画する濠や複数の掘立柱建物、導水路や水場遺構などで、これらは総体として村の屋敷地を形成するものと考えられます。

すなわち、区画北辺には平行する二重の濠 (SD1001・1732) が巡り、東辺に当たる濠 (SD1501) と直交し接続します。SD1001 及び 1732 は上幅 3.0 m 弱・下幅 0.4 ~ 1.4 m

で、深さは 1.5 m もあります。

その SD1732 以南には前述の低地 (暗色帯) が広がり、屋敷地の中枢とほぼ重なります。一帯は約 500 個の柱穴・小穴が密集し、その中で掘立柱建物 10 棟弱、柱穴列 (掘立柱塀や柵) 3 列ほどの見当を付けています。そのうち確実な 3 棟 (SB2901・2904・SA2914) のみ全体図に図示しました。SB2901 は桁行 8 間・梁間 2 間の片平 1 間の廂が付く東西長棟建物で、規模からして屋敷の主屋と考えられます。また SB2904 と SA2914 では構成する柱穴で柱根が全て遺存していました。洗い場と目される水場遺構 (SK1565) でも側柱や束柱の柱根が残っています。木製遺物の遺存度はこの遺跡の際立つ特性です。

そのほか、SD1001 以北は屋敷地の外界とみていますが、並列する土葬墓 (木棺直葬) 2 基 (SK1125・1126) が位置します。敷地の北側に守り神として供えた先祖の屋敷墓でしょうか。

3 まとめ

この 2 年で遺跡全体の約 50% を発掘調査しました。今後は古代の遺構・遺物を中心に発掘成果を整理・分析し、集落の形成から廃絶に至る変遷過程を解明したいと思います。



図2 近世屋敷地 (垂直)

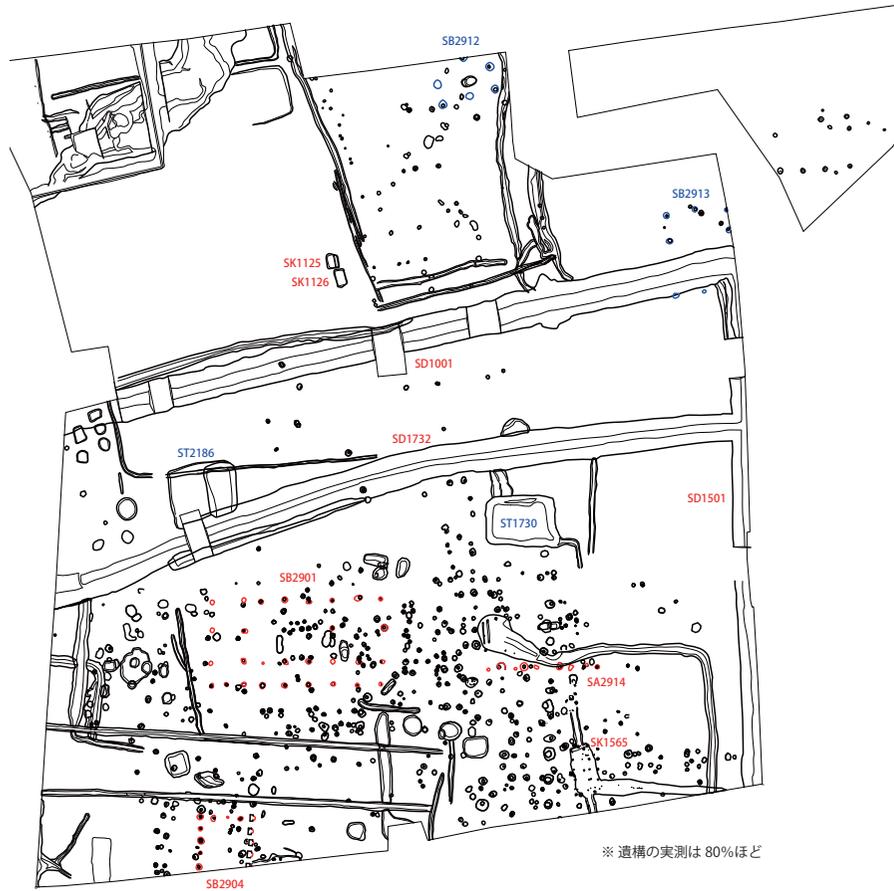


図3 C区遺構全体図 (S=1:400)



図4 SD1001 灯明皿出土状況



図5 SK1125 土葬墓 (西から)



図6 SK1126 土葬墓 (西から)



図7 SD1001 区画漆 遺物出土状況 (東から)



図8 SB2912 掘立柱建物 全景 (南から)



図9 SK1565 水場遺構 全景 (北から)



図10 SB2904 掘立柱建物 全景 (北から)



図11 ST1730 竪穴建物 土層断面 (南西から)